

「合唱＝大声を出す」ではない 全日本合唱連盟が政府へ要望書

11月12日に行われた新型コロナウイルス感染症対策分科会で使われた資料の中に、合唱は**大声を出す**行為として扱われていました。

資料7「今後のイベント開催のあり方について」、「エビデンス等を踏まえた個別イベントの開催のあり方について」の項で、次のように合唱を「**大声を出す**」と表現しています。似たように大きな声を出す行為はいくらでもあるのにとわがざるを得ません。

<感染リスク> **大声を出す** ○合唱(演者間の距離)

・飛沫、マイクロ飛沫の飛散による演者間の感染
⇒ <エビデンス・実績> ○合唱(演者間の距離)

・屋内の飛沫、マイクロ飛沫のシミュレーション
⇒ <必要な感染防止策> ○合唱(演者間の距離)

・演者やその家族の体調・行動管理
・講じる防止策(マスク、フェイスシールド、マウスシールド着用等)に応じた適切な対人距離の確保(例：マスク着用時は前後1m左右50cm、未着用時は前後2m左右1m)
・適切な換気の実施(測定装置の設置等)

この点に関して全日本合唱連盟では、11月20日理事長名で、内容の見直し・修正を強く要望しました。

合唱は「大声を出す」行為ではなく、あくまで複数の人声によるアンサンブルという音楽を演奏する行為であり、同じように複数人が発声する行為には、ミュージカル、オペラ、演劇、古典芸能などがあるにも関わらず合唱だけに焦点を当てていることは看過できず、誤解や偏見を助長させる危険性がある。また防止策としてのフェイスシールドは対面での他者からの感染を予防するものであり、容認できないとしています。

一般に合唱は「腹の底から思い切り声を出す」ものとか、「大きな声で歌えば健康にいい」とか、「ストレス発散」などと言われます。それはそれでやむを得ない面もあると思いますが、やはり合唱だけを取り上げるのは配慮に欠けていると思います。分科会では次の会合までに何らかの対応をとるものと思います。

安全性と快適さの両立を目指す 東混・歌えるマスク

東京混声合唱団が開発した「**歌えるマスク**」は、いくつかの検証によって、下部から飛沫が漏れると指摘されています。これを扱う(株)パナムジカでは、12月18日その安全性についてあらためて次のような見解を発表しました。

全日本合唱連盟が実施した「合唱活動における飛沫実証実験」やクラシック音楽公演運営推進協議会が実施した「声楽・合唱における飛沫感染リスク検証実験」の報告書において、**歌唱用マスク**(下部開放型マスク)は、一般的な形状のマスクよりも飛沫抑制性能が劣るという考察が提示されています。

一方で、一般的な形状のマスクは呼吸や口の動きが制限され、歌唱において様々な困難が生じることも事実であります。歌唱用マスクは、感染(飛沫拡散)のリスクを低減しつつ、一般的な形状のマスクのネックとなる歌唱面での課題を解消するべく開発されたものです。弊社といたしましては、これらマスクは「**合唱活動の安全を保証するものではない**」という前提のもと、感染リスクを低減することと歌唱・合唱を快適に行うことの両立を図るためのツールとして販売を続けております。製品の特性をご理解いただき各合唱団や練習施設の状況に応じてご活用ください。なお、より感染リスクを抑えるために下記の点にご留意のうえご使用いただくことを推奨します。

・参加者の体調管理や、部屋の換気、距離の確保など、各種施設や団体が示す通常の感染対策を併用する。
・練習や演奏時以外の感染対策に注意する。(歌唱時以外にも感染のリスクが存在することを参加者が理解し行動する。) 2020年12月18日 株式会社パナムジカ
<http://www.panamusica.co.jp/ja/appeal/utaerumask/>

感染防止策は、環境によって大きく変わります。使用場所の換気条件はどうか、演者間の距離や客席との距離は十分か、参加者の健康管理は適切かなどです。極論すると、世の中で活動する限りウイルス感染から完全に逃れるのは不可能かもしれません。

リスクとメリットを勘案して考え得る限りの対策を施し、その結果をフォローすることが大切です。万一感染が起きてしまった場合はその原因を調べ、次の対策に生かすことこそが求められます。